花崗岩から紐解く芦屋

芦屋のまちが纏う色

芦屋の「まちの色」について、考えてみたことがありますか？人それぞれにパーソナルカラーがあるように、まちにも固有の「色」があります。まちの色と言えば、ヨーロッパや世界各国の美しい都市の街並みに代表されるように、まちの魅力を左右する大きな要因の一つです。そして、そこに住む人々の生活や文化に影響を与え、まちの個性を生み出しています。

では、芦屋のまちが纏う色はどこからきているのでしょうか。その答えの一つが、芦屋のまちの土台となる六甲山地の地質にあります。

花崗岩が生んだ景色

六甲山地は、１００万年前の「六甲変動」と呼ばれる地殻変動で陸地の隆起と大阪湾の沈下によってできました。六甲山地のほとんどは花崗岩でできており、芦屋のほとんどはこの花崗岩が由来でできているのです。

六甲山地で産出する花崗岩は、含まれる主要な鉱物が白～桜色のため、石全体が柔らかな桜色をしています。この優しい色合いが風景に溶け込み、芦屋のまちなみを暖かく彩っているのです。建物や塀など、景観の調和を目指す現行の制度においても、使用可能な色を明るめで優しい色としているのは、まちの色に花崗岩の色が大きく影響しているからと言えます。

花崗岩の石垣
国重文 ヨドコウ迎賓館

白砂の美しい芦屋の浜辺
大正時代の絵葉書をカラー化

暮らしに根付く花崗岩

花崗岩は、芦屋のまちの色だけでなく、文化や生活にも大きく影響を与えています。

芦屋川沿いには「水車谷」の地名が残っています。山と海の距離が近く急流だった川の流れを利用して、花崗岩で作った石臼を使用した水車で灘五郷の酒造りの精米などが行われていました。

また花崗岩は、硬度が高く耐久性に優れている特徴から、明治・大正時代以降、郊外住宅地となった芦屋市域では、まちづくりに地元の花崗岩がたくさん使用されました。今でもまちを歩くと、石垣をはじめ、いたるところに地元の花崗岩が使われていることに気づきます。

花崗岩は、風化が進むと「真砂」と呼ばれる砂になります。真砂は白く、芦屋の浜辺の松と合わせて「白砂青松」と言われ、画家の小出楢重の絵や、谷崎潤一郎・与謝野晶子などの文学作品にも描かれ、芦屋を象徴する美しい風景として多くの人々を魅了しました。

私たちが普段、何気なく見ている芦屋のまちなみは、花崗岩とまちの深い関係により築き上げられたものなのです。明日からは、芦屋のまちにある花崗岩を改めてじっくり見てください。何か新しい発見があるかもしれません。